

ペン俳句会 句会報(三四四号)

令和五年五月四日(木)

兼題『更衣(ころもがへ)』、席題『立』

句会を、立春の二日前に渋谷区地域交流センター「代々木」にて開催。

大津 そうかい

桜薬降る隅田川艇庫跡

捨てられぬ手編みのチヨッキ更衣

新樹光踊子追うて天城越え

白波の立待岬啄木忌

薫風やジャズに心はミシシッピ

高橋 由紀子

兜背に立った立ったと初節句

カットサロン出ればうなじに青葉風

夏暁やママチャリ飛ばしパパ野球

あと幾度夫の背広の更衣

雨上がり光る瓦や夏つばめ

志村 良知

起重機の立つ影薄れ轟る日

遠富士の日々に青める衣替え

父の手の紐の結び目クレマチス

木漏れ日や紫淡し桐の花

いちはずの濃き紫や朝の風

首藤 しずを

白鷺の脚を忍ばせ涉りけり

夏立つや地魚光る浜の市

衣更へ白さ眩しき駅ホーム

白壁に影を濃くせり柿若葉

葉桜やぼんぼん船の上りゆく

中村 晃也

さつぱりとマスクを外し更衣

五月連休帯の書評で選る新書

小糠雨桜蕊降る流人墓地

ランドリーに山と持ち込む衣替

校庭に弾ける光夏立ちぬ

新田 ゆふき

土踏まず揉む父のゐて鳥曇

つびつびと鳥啼きさうさう若葉風

若葉雨止みて路上に子らの声

倍速に移ろふ街や更衣

すっぱりとアスパラガスを三ツに切る

松田 一文字

ネモフィラの丘の広さや風光る

もふもふの猫の毛抜けて衣更

小手毬の散りて細かな紙吹雪

逆立ちの白き霊峰初夏の湖(つみ)

霏るや曇硝子のごと覆ふ

森田 元斐

菜の花の川中島へ鷺一羽

蘇る石楠花の花新天地

宮に立つ白を極めし花水木

大道の真中を歩み今朝の夏

過ぎし日をノートに修め衣更え

長尾 進一郎

山並の青の濃さ増す立夏かな

身を任すジャズのリズムや春の夕

春風や早々と散る葉々の惜し

通学児白の眩しき更衣

信濃路の桜の遅し旅籠前

安藤 晃二

鴨川に青鷺の立ち水の音

衣更へ紬の女清水へ

苔生すや石楠花白き高台寺

ミヤンマーの僧に行合ふつつじ山

二条城被ひし枝垂れ桜かな

宮原 凧

みどりの日境内に立つ植木市

終活の白服しまう衣更

丸の内に白シャツ溢れ夏来たる

ふつくらと豆ご飯炊け一人の膳

いくたびの出会いのありて飛花落花

西川 知世

街の上に富士伸び上がる立夏かな

平棚の本の凸凹夏初

逝く春や飛行機雲の尾の緩び

更衣へて鴉の羽根を拾ひけり

水兵の腕にタトウ夏燕

次回は令和五年六月一日（木）、

兼題は夏の季語「紫陽花」（大津そつかいさん出題）、

席題は西川知世さん出題の「夜」です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

紫陽花 （手毬花・四葩の花・七変化・刺繍花）

角川書店『花の大歳時記』（監修・森澄雄）によると、「あじさいのあずは」集まる「さいは」真藍」の語からで、古名はアズサイとも呼んだ。落葉低木で、もともと日本の椈やにあつたガクアジサイから生まれたものである。梅雨期の花のそんないない頃には、おおらかに、みずみずしく咲いて目立っている。一略一 万葉集には、左大臣橘卿の「あぢさゐの八重咲くごとく弥つ代にいませわが背子見つつ俣ばむ」とほか一首が載っている

一略一 つめたい濡れた感じの花は梅雨期と重なって、わびし気で趣深い花である」と記述がある。

梅雨めく日々の暑さや、変わりゆく色合い、夕涼など、花の周りに句材がたくさん考えられて、身近な花である。

紫陽花に瞳ばかりの記憶あり 長谷川かな女

あぢさゐや軽くすませる昼の蕎麦 石川桂郎

あぢさゐや逢はばすしくもの言わむ 細見綾子

紫陽花の醸せる暗さよりの雨 桂 信子

紫陽花の夜にうづくまる善意の妻 金子兜太

かなしみはかたまり易し濃紫陽花 岡田日郎

紫陽花に伊豆の廃家の大月夜 大峰あきら

兄亡くて夕刊がくる濃紫陽花 正木ゆう子

坂の町紫陽花の町今日も雨 林 翔